



新年ご挨拶

学校法人 鶴学園
理事長・総長 鶴 衛

明けましておめでとうございます。皆様、よい新年をお迎えになられたこととお喜びを申し上げます。

平素は、本学園の教育運営にご理解ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

今年のお正月は、二日の早朝に県北のほうで雪が降りましたが、広島市内は比較的穏やかな日々でした。しかし、今年の世界経済情勢の見通しは、非常に厳しい年となりそうです。

まず昨年を振り返ってみますと、昨年9月のアメリカの証券大手リーマン・ブラザーズの破綻をきっかけとした金融危機が全世界に広がり、世界経済がいきなり変貌しました。円相場は、一時1ドル=87円台と13年ぶりの円高水準になるなど市場が混乱しました。平成20年の日

経平均株価は、一年間で42%下落し、下落率は平成2年の39%を上回り、戦後最大となりました。その結果、トヨタ自動車の株価は1年でほぼ半分に、ソニーは約3分の1になりました。半年前に、誰がこのような状況を予測できたでしょうか。本当に恐ろしい「100年に一度の津波」です。世界経済の後退懸念は、今年も続くという見方が多くなっています。

このようなとき、民間企業では景気の立て直しは出来ないとします。頼りになるのは政治による主導ですが、ねじれ国会による日本政治の不安定、リーダーが次々と代わってしまい、しっかりとしたリーダーの不在に不満を持っているのは、私だけではないと思います。

また、社会を見ても、「誰でもよかった」という卑劣な無差別殺人の件数は、日本の歴史上、もっとも多い年だったそうです。さらに、私は聞いたことがない毒物が食べ物の中に混入していたこともありました。もうないだろうと思ってい

た食品の偽装が、まだまだ起こりました。昨年を象徴する漢字一文字が、「変」となったのは当然のような厳しく悲しい、そして情けない一年でした。ただ、ノーベル物理学賞・化学賞に日本人が4人も選ばれたことは、日本国民にとって、とりわけ教育に携わっている私たちには勇気付けられるニュースでした。

こういった年でしたが、鶴学園にとっての昨年は、更なる飛躍のための基礎固めを行った年でした。まず、昨年4月より広島工業大学附属広島高等学校・中学校の校名を「広島なぎさ中学校・高等学校」に改称するとともに、生徒の制服を一新しました。更には、「なぎさ公園小学校」の隣接地に新校舎を昨年の9月に完成させたことにより、鶴学園における私学らしい特色ある「21世紀型高学力の養成」「国際性の涵養」「創造性の練磨」「人間力の育成」という教育目標を具現化するための12年一貫教育体制を、名実共に構築することができました。本年4月からは「なぎさ公園小学校」の第一期卒業生を「広島なぎさ中学校」へ迎えることが出来ます。

広島工業大学においては、多様化する学生のニーズや産業界の要請に応えるために、平成22年度に向けて学部・学科の改組再編を検討・実施することとしました。併せて三宅キャンパスにおいて、講義室を中心とする新校舎を昨年12月に引き渡しを受け、本年4月の本格的な

運用開始に向けて準備を行っています。この新校舎を「三宅の森 Nexus21」と名づけました。Nexusとは「絆」を意味します。広島工業大学は、昭和36年に広島工業短期大学として深い緑の森につつまれた五日市町三宅で生まれ、昭和38年に広島工業大学と発展し、これまで建学の精神『教育は愛なり』と教育方針『常に神と共に歩み社会に奉仕する』に則り、倫理観をもった技術者育成に取り組んでまいりました。私たちは、先輩たちが築いてこられたその伝統を受け継ぎながら、三宅の森のこの新しい学び舎に集う若者に、なにより「21世紀を生き抜く知性」を育みたい、かつ、過去と未来、教職員と学生、先輩と後輩、男子と女子、大学と地域の“新しい絆”がここから形づくられていくことを強く願って、この名前を付けました。平成18年に創立50周年を迎えた本学園の記念事業としての教育環境整備は、これで大きな山を越えたこととなります。

しかし、今後はどうでしょうか。日本の高等教育事情を見ますと、私立学校への厳しさが年々増しているのがわかります。我が国の私立大学における昨年4月の入学状況は、約47%が定員割れを起しています。地方と大都市圏の大学の格差が広がっており、二極化が顕著になっています。経済不況によって学生の就職状況が急に厳しくなってきました。また、収入の多くを授業料に頼らざ

るをえない私学に対しての私学離れも懸念されます。私学にとっての逆風が強く吹いています。

このような中、日本の教育機関、とりわけ大学は、これまで自分たちが実践してきた教育を真剣に見直さなければなりません。つまり、これまで日本の大学教育は、高度経済成長に甘えてしまい、基礎学力、専門基礎教育を教えるべきという“画一的な人材育成に甘んじていた”のではないのでしょうか。私は、この点を非常に重要視しています。多くの大学は、建学の精神、教育方針に基づいたオリジナルな教育作り、言い換えるならば学生の個性や特性を伸ばす教育を怠ってきたところがあります。大学進学率が約50%となり多様な学生を受け入れざるを得ない今、教育の質の維持・向上に向けた努力を怠る大学の将来は、非常に厳しくなると言わざるを得ません。

このように厳しい時代だからこそ、私たちは原点に戻って、私たちの教育を見直さなければなりません。いつの時代、どんな国にあっても、教育の効果は一人ひとりの教職員の活動の総和だからです。本学園の教職員、一人ひとりが自分を見つめなおし“鶴学園らしい”教育づくりに取り組んでまいります。

このように考えているときに、日刊工業新聞に次のような記事が掲載されており、私は共感しました。

『金融工学などという格好はよいが、もともとバーチャルな貨幣をさらに仮想化しているようにみえる。レバレッジは胴元が金を融通して、ばくちを打たせるみたいだと思うのは金融を知らないからなのか。金融は“産業の血液”である。血液が体の何倍にも膨張すれば、いつかは必ず血管が破れ、体までおかしくなるのは自然の理。体に見合った血液が必要なことは言うまでもない。頑健な実体があってこそそのバーチャルマネーである。今年モノづくりを中心に産業の体を鍛えなおすことが第一。一攫千金を夢見るよりは額に汗したい。』

今になって考えてみますと、世界の経済不況は、バーチャルな貨幣にばかり目が向いてしまい、人間として原点である額に汗をかくことを忘れていたような気がします。教育も同じです。今や完全に私立学校は、児童・生徒・学生を選ぶ立場から児童・生徒・学生から選ばれる立場に変わりました。私たちは、子どもたちから選ばれる学校になるためにはどうすればよいか、子どもたちや保護者から選ばれる教育とはどのような教育なのか、を真剣に考えなければなりません。本学園では、教育環境が整備された今こそ、こういった課題に対して教職員全員が額に汗をかいて取り組んでまいります。

本年も鶴学園への益々のご指導ご鞭撻を賜りますようお願いをしまして、新年のご挨拶とさせていただきます。